様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０６５

研究課題名（和文）アルゼンチンカトリック教会にみる公共宗教性と救済宗教性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Profile of Argentine Catholic Church: Public Religion and Private Religion of Salvation

研究代表者
渡部　奈々（WATABE, NANA）

早稲田大学・社会科学総合学術院・助教

研究者番号：００７３１４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アルゼンチンカトリック教会の公共宗教性と救済宗教性の特色を明らかにした。具体的には①アルゼンチンカトリック教会が国家宗教から公共宗教へと変容した歴史的経緯を整理分析し、②カトリック教会内に存在する二つのグループ「組織教会」と「民の教会」における、公共宗教としての実践を明らかにした。さらに、近年カトリック教会が推進している③カリスマ刷新運動に焦点を当て、カトリシズムの救済宗教的側面を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study illustrates the profile of Argentine Catholic Church as public religion and private religion of salvation. First, the findings of the study illustrate how the Argentine catholic church has transformed from state religion into public religion. Second, the findings reveal that we can classify catholic church into two groups: official church and people’s church which play the public role in different ways. Third, this study suggests that we can find the profile as the private religion of salvation in the Catholic Charismatic Renewal.

研究分野：ラテンアメリカ地域研究

キーワード：カトリック教会　公共宗教　救済宗教　アルゼンチン　第二バチカン公会議　民の教会　カリスマ刷新運動

１．研究開始当初の背景

近代化のプロセスにより宗教は次第に私事化され、公的領域における政治社会的影響力は減退するという世俗化のテーゼは、1980 年代に世界各地で起こった「宗教の復興」とも呼ばれる宗教現象により、その妥当性が問われるようになった。今日広く共有されている理解は、現代社会が単に世俗化した社会ではなく、信教自由の保障および国家と宗教の制度的分離という点での世俗的でありながらも、諸宗教が公的領域で一定の影響力を有する社会というものである。『近代世界の公共宗教』の中で、カサノヴァはこれを宗教の「脱私事化」と呼び、脱私事化した宗教を公共宗教と規定した。

アルゼンチンカトリック教会は政府と密接な関係を保持しながら、自らの権益を保持してきた歴史を持つ。軍政（1976-83 年）を支持し、その大規模な人権侵害を黙認したことから、カトリック教会は国民の支持を失い、民政移管後の市民社会構築プロセスから取り残された。しかし 2001 年にアルゼンチンを襲った経済危機により、カトリック教会は市民社会を擁護する公共宗教へと変容した。カトリック教会を論じるうえで留意すべきは、教会内にいくつもの潮流が存在しうる点である。アルゼンチンでは、カトリックヒエラルキーに基づいた既存の「組織教会」とは異なる「民の教会」がそれである。「民の教会」は「民衆と共に生きる教会」という第二バチカン公会議の理念の実践を目指した革新派司祭らを中心に構成されており、1968 年には軍政に抗議する大規模な司祭運動が拡大した。この時代の「民の教会」はマルクス主義の影響を強く受けており、司祭運動も左翼的であったが、1983 年の民主化以降は貧しい民衆の社会支援を第一に、居住支援活動やスラム支援を行っている。

要約すると、国家宗教から公共宗教に変容した「組織教会」と、左翼的政治運動から社会支援活動へと理念実践の形態を変えた「民の教会」という二つの潮流があり、近年では両者の収斂が見られるが、それを検証した研究がアルゼンチン国内にも未だないのが現状である。この両者を調査することによって、アルゼンチンカトリック教会の公共宗教性が明らかになると考える。しかし、その公共宗教性のみを取りあげるのは、アルゼンチンカトリック教会に対する包括的理解を妨げることにもなる。前述したように、脱私事化した宗教が公共宗教であるとすれば、公共宗教が対象とするのは人権や民主化といった公的事柄であり、個人の霊的救済などの私的事柄が取り扱われることはない。市民社会での役割を確立したアルゼンチンカトリック教会が昨今、信徒離れという深刻な問題に直面している原因はここにあると申請者は考える。1980 年代後半以降、アルゼンチン社会では個人の霊的救済や癒しを強調するペンテコステ派教会が拡大しており、2000 年の時点で、アルゼンチン国民の約 22%がペンテコスタリズムに帰依し、その礼拝スタイルを実践しているといわれている。これに危機感を抱いたアルゼンチンカトリック教会は、ブラジルですでに盛んとなっているカリスマ刷新運動を容認し、未だ少数派ではあるが、カトリック教会でペンテコスタリズムの実践を行うようになった

本研究の着想の背景には、申請者がこれまで続けてきたアルゼンチンにおけるキリスト教に関する研究がある。「民の教会」の誕生と変容、今日における実践活動に関しては、3 つの論文「アルゼンチンにおける「第三世界のための司祭運動」―「聖」と「俗」のイデオロギー融和の試みと失敗―」、「現代に継承される「第三世界のための司祭運動」―アルゼンチンにおける市民組織マドレ・ティエラの事例から―」、「アルゼンチンで深刻化する麻薬問題とスラム司祭の取り組み」を発表している。そして「組織教会」における国家宗教から公共宗教の変容は、現在査読中である「アルゼンチンカトリック教会の変容―国家宗教から公共宗教へ―」で扱っており、カトリック刷新運動に関しては、研究ノート「アルゼンチンにおけるペンテコステ派の拡大」で触れている。

特に、アルゼンチンカトリック教会の救済宗教性を扱うことを決定づけた背景には、日本における公共宗教をめぐる議論がある。東日本大震災以降、宗教団体による災害支援が積極的に行われており、宗教学者の間では宗教の社会的貢献が評価されている。被災者支援において宗教団体が期待される役割は、黙って被災者に寄り添うことであり、自宗教を説くことではないという。東北大学宗教学研究室に開設された「心の相談室」の目的は、宗派宗教を越えた宗教者が集まって、自分の宗教の布教ではなく、被災者の方々に宗教的なケアをもたらすこととされているが、生死に関する宗教的理解や自らの信仰告白なしに、宗教者がどのようにして宗教的ケアをすることができるのだろうか。そもそも、宗教団体や信仰を持つ個人が社会支援活動に従事する意味はどこにあるのか。単なる物質的支援やメンタルケアであれば、支援者が宗教団体である必要はない。肉体と心に関するケアに加えて、霊的ケアこそが宗教に課せられた使命ではないのだろうか。アルゼンチン出身の現ローマ教皇フランシスコが 2013 年の一般謁見において、「カトリック教会は単なるボランティア組織になってはならない」と、教会の社会活動の在り方について注意を喚起したのは記憶に新しい。宗教における公共宗教性のみならず、救済宗教性を研究することにより、宗教だからこそ果たしうる役割が明らかになると考える。

２．研究の目的

建国当時から 20 世紀半ばまでその社会において、絶大な権力を握っていたアルゼンチ

ンカトリック教会が新たに獲得した公共宗教としてのアイデンティティと、カリスマ刷新運動に見られる救済宗教性に関して、未だまとまった研究はない。本研究では、①アルゼンチンカトリック教会が国家宗教から公共宗教へと変容した歴史的経緯を整理分析する。そして、②カトリック教会内に存在する二つのグループ「組織教会」と「民の教会」における、公共宗教としての実践を調査する。さらに、近年アルゼンチン社会で拡大しているペンテコステ派教会に対抗して、カトリック教会が推進している③カリスマ刷新運動に焦点を当て、一般の公共宗教論に欠如しているカトリシズムの救済宗教的側面を明らかにする。一見、対極にあるとも思われる公共宗教性と救済宗教性がアルゼンチンカトリック教会において、いかに共存しているかを明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

(1)「組織教会」の中心である司教団の文書を調査し、国家宗教から公共宗教への変容に伴う言説の変化があったのかを調べる。多くの司教文書の中でも重要性の高いものは限られており、それらの文書の一部はカトリック教会を扱った論文などで引用されている。軍政の社会暴力を肯定した文書や、やむを得ず民主化を容認した文書など、文書からその時々の司教団の立場をうかがい知ることができる。それゆえ、国家教会として権勢をふるっていた時代の文書と市民社会の擁護者としての文書には、大きな違いがあることは疑いない。

(2)「民の教会」に関する資料調査に加え、現在活動している聖職者や信徒にインタビュー調査と活動の参与観察を行う。「民の教会」に関する資料は、1960 年代後半の司祭運動に関するものとそれ以降のものに分類される。1968－73 年にかけて司祭運動が発行していた機関紙 Enlace 全 28 号も CD－ROM にてすでに入手済みである。しかし、1976 年以降の資料は非常に少ない。軍政に抑圧された「民の教会」の司祭らは自らの命を守るために、国内潜伏や国外逃亡を余儀なくされていたのである。民政移管後も「民の教会」そのものに関する資料は少ないが、同じ理念を共有して居住支援を行っている市民組織マドレ・ティエラのホームページに加えて、機関紙や書籍を出版しており、これらの入手は可能である。

(3)カリスマ刷新運動に参加している教会における参与観察と、ペンテコスタリズムを実践しているミサへの参加者へのインタビュー調査を行う。カリスマ刷新運動の中心となるのは、カリスマミサと呼ばれるミサにおけるペンテコスタリズム実践である。申請者が 2007 年にブエノスアイレスに滞在中、カリスマミサに一度参加したことがあるが、ペンテコステ派教会の礼拝とは異なるカトリック教会ならではの儀礼がいくつもあった。カトリック教会では通常、教区に住む信徒が教区教会のミサに参列するが、カリスマミサに関しては、奇跡や癒しを求めて遠方からミサに参加する信徒が少なくない。それゆえ、カリスマミサは閉鎖的な共同体祭儀ではなく、通常のミサ以上に開かれた空間となっており、参与観察やインタビューは十分可能である。調査地の候補としては、アルゼンチン国内でカリスマ刷新運動が最も盛んな首都近郊のサン・ミゲル教区が挙げられる。

４．研究成果

(1)組織教会の変容と実践

アルゼンチンにおけるカトリックの歴史は概して国家宗教としての歴史といえる。正統性を有する機関として教会は時の政府に圧力をかけ、自らの権益を保持してきた。第二バチカン公会議以降、パウロ六世とヨハネ・パウロ二世の下で多くのカトリック教会が人権擁護と社会正義に寄与する姿勢を明らかにしていたにもかかわらず、アルゼンチン教会の保守的体質は変わることなく、むしろ軍政と癒着することにより強化されていった。その後 1983 年の民主化によって組織教会は国家宗教としての権力を失い、さらに社会の世俗化と信徒離れという新たな苦難に直面した。しかし、2001 年経済危機の際に行われた「アルゼンチンの対話」が契機となり、組織教会は倫理的権威者として新たな公共的役割を担うようになった。これはカサノヴァが論じた公共宗教のモデルとは大きく異なるものであり、公共宗教としてのアルゼンチン組織教会の特異性が明らかになった。

(2)民の教会の変容と実践

民の教会は、「人々とともに生きる教会」という第二バチカン公会議の理念の実践を目指して、その時代や地域ごとに形を変えて今日まで活動を続けている。1968 年に誕生した「第三世界のための司祭運動」（MSTM）による時の軍事政権への抗議運動は、カサノヴァが公共宗教の事例として取り上げたブラジル教会に相似しており、市民社会を促進する公共宗教の萌芽であったといえる。しかしその政治思想が、革新派司祭たちをアルゼンチン社会と教会組織から孤立させ、MSTM は次第にその存在意義と公共性を失っていった。

民政移管後、MSTM の運動は様々な形で継承された。その一つが、市民組織マドレ・ティエラによる土地取得と家屋建築を中心とした居住支援とコミュニティ開発であり、もう一つは、MSTM の継承者ともいわれる「スラムのための司祭グループ」による麻薬問題への取り組み（依存症者とその家族への支援）である。MSTM が国家体制の変革により民衆の解放を求めたのに対して、マドレ・ティエラやスラム司祭たちは、居住環境の改善やスラム住民に対する差別の根絶のために、法改正や福祉政策の充実を要求している。アルゼンチン国内における政治体制の変化と、バチカン内における革新から保守への変化が、これら

の差異を生み出す要因となったといえる。このような民の教会の穏健化に加えて、ベルゴリオ枢機卿（現教皇フランシスコ）がスラム司祭たちを積極的に支援したことにより、組織教会も民の教会の社会支援活動を支持するようになった。また、ブエノスアイレス近郊のモレノ市での調査に基づき、草の根レベルにおける民の教会の公共的役割を明らかにした。

(3)カリスマ刷新運動

アルゼンチンでカトリックカリスマ刷新運動が開始されたのは 1973 年であり、1980 年代には運動が急速に拡大していった。カリスマ派・ペンテコステ派は聖霊を受けることを重視し、異言、癒し、預言や奇跡の業は聖霊の働きであると考えている。特に、「癒し」はアルゼンチンのカトリックカリスマ刷新運動で最も重要視されており、多くの信徒が聖霊による奇跡的な癒しを求めてミサに参加している。通常のカトリック教会のミサと異なり、「癒し」のミサでは信徒たちが声を出して自由に祈り、癒された体験などの証をする。これらはペンテコステ教会でも行われるが、水と塩の聖別や、聖体降福式はカトリック教会独自の儀式である。自らの病気や困難のためにミサに参加する信徒もいるが、病気や薬物依存症の家族や友人の写真を持って参加する信徒も多くいる。ミサを執り行う司祭の説教や祈りの内容も、薬物依存からの解放と癒しに関することが非常に多く、麻薬問題がアルゼンチン社会でいかに深刻化がうかがえる。

近年、組織教会の中心となるアルゼンチン司教団は国内に蔓延する麻薬問題に強い危機感を示し、「薬物依存に関する全国委員会」を設置するなど全国的取り組みを行っている。そして草の根レベルでは、スラム司祭ら民の教会が薬物依存症者への支援活動（肉体的・精神的ケア）を行っている。これらはカトリック教会がアルゼンチン社会で担っている公共的役割であるといえよう。また同時に、薬物依存症からの超自然的な癒しを求める個人にとって、「癒し」のミサを提供するカトリシズムは非常に私的な救済宗教としての役割を果たしてることが明らかになった。

(4)新たな知見

モレノ市で行った調査に基づき、草の根レベルにおける民の教会の公共的役割をソーシャル・キャピタルの視点から考察した。カトリック教会は多様な外部ネットワークを用いて公共的役割を果たしているといえるが、そのすべての支援活動が公共性を有してるわけではないことが明らかになった。また、民の教会が地域において公共的役割を果たしていても、貧困の根本的原因である構造的不平等の解決なしには、社会階層間の相互行為は成立せず、社会的包摂の実現は不可能であることが確認された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 渡部奈々. 2015.「アルゼンチンカトリック教会の変容―国家宗教から公共宗教へ」『宗教と社会』21 号，17-31，査読有 https://doi.org/10.20594/religionandsociety.21.0_17

〔学会発表〕（計　３件）

① 渡部奈々「カトリシズムにみる公共宗教性と救済宗教性―現代アルゼンチンの事例から」第 90 回日本社会学会大会，2017 年 11 月
② 渡部奈々「Transformation of Argentine Catholic Church」CEIL-CONICET（アルゼンチン，ブエノスアイレス）2017 年 3 月
③ 渡部奈々「アルゼンチンカトリック教会の変容」日本ラテンアメリカ学会東日本部会，2017 年 1 月

〔図書〕（計　１件）

① 渡部奈々. 2017.「アルゼンチンカトリック教会の変容―国家宗教から公共宗教へ」成文堂

〔その他〕

早稲田大学博士学位論文「アルゼンチンカトリック教会の変容―国家宗教から公共宗教へ」2017 年 7 月
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=36069&item_no=1&attribute_id=20&file_no=1
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=36069&item_no=1&attribute_id=20&file_no=2
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=36069&item_no=1&attribute_id=20&file_no=3

６．研究組織

(1)研究代表者

渡部　奈々(WATABE, Nana)
早稲田大学・社会科学総合学術院・助教
研究者番号：00731449